

加賀市加賀橋立伝統的建造物群保存地区におけるサイン整備及び散策ルート整備

金沢美術工芸大学 鏑 隆弘 教授

高村 美・吉田 鈴・長谷川 晶子・三宅亜里彩・神林 優志・地金 育美・木下 侑樹・高田 陸央

金沢工業大学 谷 明彦 教授

酒井 瞭吾・西野 晃・清水 俊行・藪本 浩貴・岩坂 みづき

石川工業高等専門学校 道地 慶子 教授

高嶋 ひかる・坪田 咲・中越 香織・浜井 京香・山崎 凌平・石塚奨冨・表 千笑・酒井 練・

谷保 太一・宮西 夏里武

1. 調査研究成果要約

北前船船主屋敷が歴史的景観を見せる重伝建地区において、来訪者にとっての快適性と魅力向上を図るため、地区内の拠点と道路の空間整備およびサインの整備を行った。これらの回遊性向上策に加え、地区全体を見下ろす眺望デッキのデザインを行った。三つの高等教育機関の学生が混合する二つのチームで競いながら、構成員それぞれの専門性を活かして、地域住民の活動参加機会増加と地域景観向上を狙いデザイン案を作成した。

2. 調査研究の目的

加賀橋立地区への来訪者にとって魅力となる快適性と回遊性を高めるために、これまで継続的に地区内の立寄施設、庭園、道路、サインの整備を行ってきた。地区は重伝建の指定に加え、平成 29 年に北前船船主集落として日本遺産に認定され、訪問者数は増えてきている。しかしながら拠点施設の訪問に留まり街並みを楽しみながら散策する方は多くないのが現状である。本活動は、回遊性と滞在の価値を高めながら街並みの魅力を伝える仕組みを充実させ、より多くの訪問者を招くことと、地区住民が保存された街並みの中で暮らし続けることのできる環境のあり方を共に考え創造することを目的としている。

3. 調査研究の内容

今年度の活動は、これまでの活動内容を地域住民と共に振り返ることから始めた。当初に計画した活動内容について、この機会に確認した。10 月末までの活動は、現地作業を中心に、次のような内容で行った。

① サインの設置

昨年度の活動で試作したサインについて、現地に適した素材を選定した。加賀市教育委員会および観光課で試験施工について発注手続き中である。

② 案内板のデザイン

昨年度に行ったデザインについて、示される情報の内容と表示方法について最適な形を検討した。

③ 眺望デッキ設置の検討

集落の家並みを見下ろすことのできる眺望点において、休憩機能を備えるデッキの設



眺望デッキ設置予定地の測量

置を計画、現地における敷地形状の測量、図化に加え眺望点に至る道の草刈りを行った。

④ 拠点の整備

これまでの活動により一部整備された木村家では、訪問の魅力をさらに高め、滞在時間を長くできるように、庭園の整備を行った。

⑤ 眺望の道の整備

地区の屋根並みを眺めながら歩くことのできる道の快適性を高めるよう、雑草の除去と転落防止のための植栽を行った。



木村家庭園の整備

11月から現在においては、眺望デッキのデザインを行ってきている。デザインは、三つの学校の学生が混ざるチームを二つ作り、それぞれが案を示す形で進めてきている。11月初めにアイデア提示を行い、デザインの方向性について確認を行った。デザインにおいては次の点について留意し進める事を確認した。

- A. 来訪者が安全に眺望を楽しむ事ができる形状を持つこと
- B. 地区内の中心にある広場から見える施設となるため、目立ちすぎる構造物とならないこと
- C. 地元住民と学生ができるだけ自分たちで施工できる形状であること
- D. 人力で運びやすい材料で作れること



眺望の道の整備

アイデアは次のものが示された。



A 案



B 案

検討では、出されたアイデアに対し次の点について指摘があった。

・デッキの規模と形状

敷地の大きさに対して大きすぎるのではないか。

扇型に広がる形とすると、部材の成型が難しく、コストが上がるだろう。

- ・ベンチの位置

崖近くから後ろに下げた場合、眺望を十分に楽しむことができないのではないかな。

- ・ベンチの構造

デッキと同様に扇型の板材を使うことはコスト増と施工の難しさにつながる。

- ・手すりの構造

人が寄りかかっても倒れたりしないようにするには、頑丈な材料としっかりした基礎が必要であり、自分たちで施工することが可能だろうか。

- ・舗装材料について

芝生を張ったとしても、手入れしないとすぐに雑草やササに覆われてしまう。瓦砂利などなんらかの舗装を検討すべきである。

1月中旬である現在はそれらの指摘を克服する形でデザインを進めている。1月末に地元住民に対して二つの案を示し、最終案を選ぶとともに、意見を反映させた形態として完成させることとなっている。

4. 調査研究の成果

これまでに引き続いて行ってきた立寄拠点と回遊路の整備では、現場で作業をすることで、活動の積み重ねによる環境の向上を実感しながら、訪問者のための魅力向上の方向性を見つけることができた。拠点である木村家庭園整備では、地被植物を植栽した築山が豪雨で削られ、繁茂する前にまだら状になってしまっていることや、植栽したヤナギが計画通りに電柱を隠すこととなったが繁茂しすぎている状況に接し、継続的な管理の重要性を確認することができた。眺望の道の整備では、崖地の肩部分への植栽により安全性と景観の向上が図れている一方、石造りの階段については植物の根茎が内部に成長し構造を歪めている点も見られた。学生の作業としてできる部分と専門家に依頼する部分の調整など、今後の活動の進め方の課題を見つけることができた。

今回進めている眺望デッキのデザインでは、敷地の測量から始めることとなった。測量においては、眺望点の高さを測る様々な方法について案を出しながら実施した。また敷地の広さや起伏の測量では、凹凸を体感しながらこれから行う施工の内容を想像することができた。学内の演習では計画、設計の段階までを行うが、実際の施工を見据えた課題は極めて少ない。この活動においては、課題にかけている点を補完できたと考える。

また現在継続中のデザインワークは、三つの学校の混合チームにより進めている。空間を扱う視点において共通項は多いものの、スケールやデザインアプローチ、デザインボキャブラリーにおいて異なる点も少なくない。共同作業を行うことで、異なる職種の人々と共同でプロジェクトを進めることとなる社会での実践のトレーニングとなった。また地元住民を交えた会議では現実的な要望もあり、大学で行う課題とは異なる視点と展開を求められた。

5. 来年度の調査研究計画

サインについては、試験施工されたものを地元の方と共に来訪者の意見を聞くなど検証し、加賀市役所に対し地区全体への施工の展開を働きかけてゆく。案内板についても同様に進める予定である。

地区内の眺望点周辺については、眺望を阻害している樹木の伐採、アプローチ道の除草、眺望デッキの設置を計画している。樹木の伐採については地区保存会から専門業者に委託してもらい整備、その他については地元住民の方と共同で作業する予定である。

眺望点までのアプローチ道は、自然公園の園路から枝分かれした一本道で、回遊性にかける動線となっている。地区住民の方によると、かつては南側の尾根沿いに道があり出水神社へ抜けられたこと

がわかっており、このルートを整備すると地区全体の回遊性は大きく向上することとなる。来年度はルートの調査と整備計画を進めることとする。

6. 調査研究に対する地域からの評価

地元住民の方からは、試験施工ながらサインの設置までできたことは、活動の成果であると評価してもらっている。また日本遺産としての認定は、訪問客を増やしており、地元の方は建物だけでなく道路や庭園、眺望点など立寄拠点の整備の重要性を認識している。目に見える形で学生の空間整備活動は、より多くの地元住民の方に自身の活動が重要であることを気づかせてくれるものであるとの声も聞いている。このような評価をもとに、より多くの活動メニューを用意し、地区住民活動自立の一助となるよう活動を続けたい。